ここでも忘れられない出来事がありました。それは、ある日、一同は広場の土の上に座らせられ、その周りを数人の日本人が取り囲みました。この人たちはソ連の共産主義に共鳴した人たちでした。我々に向かって共産主義に同調しろ、同意の者はその場に立てと、どなります。もちろん立った者は一人もいません。するとその者どもは腹を立て、「言うことを聞かないのなら全員ラーゲルに帰す」一人立ち、二人立ち、ついに全員仕方なく起立しました。

こんなこともあったが、待望の船に乗れました。もちろん日本の船でした。このあたりでようやく帰国が本当だという実感がわいてきました。船が出航、舞鶴まで何日たったか覚えていませんが、全員がほとんど眠っていないと思います。

舞鶴で五百円いただきました。もちとリンゴを買って食べた。そのおいしかったこと、今でも忘れることができません。

広島駅に着いて、また一驚、一面の焼け野原です。それが何のためとはわからないまま、乗り物が何もないので、一時間余り歩いて帰りました。

シベリア抑留記

福島県　小泉与次郎

一　大正十四年六月八日出生　福島県田村郡船引町大字船引字南町通四十三番地

最終学校　県立郡山商業学校卒。卒業後、家庭用品書籍販売自営業に従事。

家族構成　六人。最終校卒業は昭和十七年三月二十五日卒。

一　昭和十九年十二月二十五日、現役兵として会津若松市東部二四部隊集合、雇用員として朝鮮羅南へ。第一九師団第七六連隊第二中隊に配属となる。

一般歩兵、軽機班編入。一般正規の軍服着用。装備としては三八式歩兵銃、九九式歩兵銃、軽機関銃（三八式）、擲弾筒。

一　ソ連軍の侵攻は昭和二十年八月九日夜十時。夜間

飛行にて照明弾各地に落下させ状況把握、昼間の戦闘を有利に展開させようと実施された。

八月十日未明国境を侵入。各地ともに戦車五、六両編成を一組として侵攻、これに対して日本軍、阻止する火器はなし。十キロ爆薬を持って戦車めがけて自爆にて阻止した。

一　終戦詔勅は戦闘中にて、詔勅の情報等は混乱状況にて察知できず。とにかく戦車阻止の戦闘にて、感慨等は念頭になし。

終戦後武装解除。満州の図們において満鉄宿舎の広場で武装解除後、満州延吉に集結させられた。当時のソ連軍の拘束は特になかった。逃走すれば命がないとの連絡は全員に通達された。延吉市集結中は食糧と飲料水に相当苦労した。

占領下のソ連軍行動は、特別にひどくはなかった。

二十年九月十五日、ソ連軍の指示により作業大隊十五大隊の編成で入ソ、歩行約二週間、ソ連領の国境の町クラスキノに到着。そこにソ連鉄道が敷かれており、そこから鉄道輸送にて作業地に輸送された。

一　入ソは歩行軍。朝七時ごろ出発。出発前に飯盒で道端付近の木などを燃料として朝食をとる。就寝は道路両端に外被をかぶり背嚢を枕に野宿である。

鉄道の地点まで歩行で連行され、そこから輸送用の有蓋貨車が入ってくると一貨車に大体六十名くらいが乗車。有蓋貨車を二段に仕切り、そこへ乾燥の藁が敷いてあり、貨車の片隅に穴をあけ、桶を取りつけ大小便を行う。貨車の中は真っ暗、戸は完全に閉めてある。一日一回約二十分くらい停車、そのとき食事が木製の樽（日本製の漬物用）の中に味付けおかゆが配られる。量は飯盒に約半分、それが一日分の食事である。このほかは一日じゅう貨車は走り続けている。とても沿線の様子などはわからない。

満州国とソ連との国境都市クラスキノには幾つか部隊が到着しており、鉄道の終点で、近くにポセット湾が見える。北千島の日本軍が船で輸送され、この地点から貨車輸送で奥に連行された。

また、ここはクラスキノの町で、大体北朝鮮方面からの戦略物資・戦利品の集積地になっており、ソ

連の輸送用トラック（米国製）約百台近くが駐留しており、三交代にて戦利品を運んで貨車に積み込んだ。日本兵約百五十名が配置され荷積み作業を行っておった。

昭和二十一年三月末、百五十名は十方面に分散されて移動、主に炭坑地帯に配置された。

約二十五日間貨車輸送。中央アジア・ケメロボ州のキシロフカの町、ドンバス炭田地帯に着く。世界でも量質共に一、二番の炭質である。

収容所建物は鉄筋コンクリート、約千人。他建物にはドイツ人約千人がおった。衛生関係はまあ悪くはなかった。ほかの収容所の話によると十日に一回は入浴の設備に入って体を洗った。

労役は採炭、貨車積み作業、時間八時間。朝夕の点呼は毎日実施された。

ノルマを達成しなかったときは食糧減配。採炭については良質で豊富、どこでも簡単に採炭ができるため、設備が不完全で身に危険が非常に多く、怪我人が続出した。体重が減ると作業を止め、仕事に就かせない。健康の管理について特別の配慮はない。

着衣については、夏は上衣は綿の衣服、中は綿の肌着上下、冬は綿の肌着上下に綿布に綿が入った上衣服、それに防寒靴（ソ連人と同じ長防寒靴）、防寒帽（ソ連製）。

食事は一日三度であるが、収容所より遠方の場所は昼食時には帰らず昼食抜き、夕方時に昼食と一緒にとる。朝は黒パン二百五十グラム、スープ五合、野菜はカルトーチカ一切れか二切れ、昼食はパン百グラム、スープ五合、夕食は粟と燕麦のおかゆ約飯盒の中蓋に一杯くらい、それが一日の食糧の状況。とにかくこれで重労働は無理である。このほかにタバコ一日五本分、砂糖は一日十グラム。

休日はほとんどなかった。娯楽施設皆無。収容所内部居住場所は、コンクリート・木製二階建て寝台、窓は明るいほどにあった。その他は何もない。通路は、居住密度の高い人間が通る通路としては狭い。

洗脳教育は、赤旗の歌を夕刻全員外に整列して合唱。そのほか日本新聞と称する新聞、特にソ連よき

宣伝を記載。

懲罰は、作業の出来がよくないと、責任者（日本人）若しくは何人かグループで、収容所の一室に一晩じゅう翌朝まで肌着のまま入室させられる。寒さの冷えで一睡もできない。

抑留中は、種々さまざまな状況の中で年輩者は体力的にやられてきた。若い者はその反対に、それに精神力が一枚加わり何とか耐えてきたという感じがする。言葉では端的に表現はできない。体験者同士で話し合わないと理解できないと思う。

帰還は中央アジア・ケメロボ州キシロフカ町で、昭和二十四年七月七日朝七時ごろ帰還の貨車へ乗り込んだ。帰還のときは貨車の戸は全開にして走った。ナホトカ港に七月二十五日に到着した。

帰還の知らせは、収容所内にて夕刻ソ連人が名前と番号を読み上げた。夜、駅に徒歩にて行進した。

帰還船名は遠州丸（七千八百トン）貨物船。船が公海洋上に達したとき、民主教育者一団（約十五名くらい）が、乗船帰国者と一般抑留者に今度は反対に相当な打擲などを受けた。一層の混乱となった。舞鶴港上陸は八月二、三日かと思われる。

一　帰還できたことはみんなおかげであり、戦闘交戦中、抑留中に亡くなった戦友を想うとき、これから世間のため家族のために全力を尽くす思いを胸におさめ、現在までやってきた。